PROJECT

宗教研究の盲点を見極める

文
長谷千代子

共同研究 ● 宗教人類学の再創造──滲出する宗教性と現代世界（2013-2016）

消防の守護聖人フロリアンのためのミサのあと、消防団員が聖人の描かれた団旗を見せてくれた。（2007 年 5 月 6 日、スロヴァキア共和国西部、神原ゆうこ撮影）。

本共同研究は、ここ 2、30 年間で宗教的現象自体やそれを理解するための認識・解釈の枠組み、および宗教概念・イメージなどに、世界的に大きな変化が起こりつつあるという認識のもと、新たな宗教研究の方向性と手法を模索することを目的として、2013 年 10 月にスタートした。

2 年目となる今年度は各自のフィールド経験以外に知見を広げることに主眼をおいて、2 度の研究会を開催した。以下、研究会の様子を報告しつつ、今年度得られた成果と今後の展望について総括する。

日本の宗教人類学の見直し

平成 26 年 5 月 24 日に開催した今年度第 1 回目の研究会では、前年から続けている各研究員による「近代宗教制度報告」のほか、2 名のゲスト講師を迎えて日本の宗教人類学についての再検討を行なった。「宗教人類学の再創造」を謳う以上、従来の日本の宗教人類学の総括が必要と思われたからである。

田中雅一（京都大学）は「日本の宗教人類学はなぜ自壊したのか？」と題し、日本における文化人類学と宗教人類学のパラダイムとその歴史的変化を、四象限モデルを駆使して提示し、今後の展望を示した。そのなかで印象深かった指摘の 1 つは、まず研究スタイルに関することである。日本の宗教人類学の出発点となった佐々木宏幹、吉田禎吾らの研究は基本的に複数の調査地および他地域の事例研究を参照する比較の視点に立っており、かならずしも特定の場所での長期フィールドワークに基づく成果ではなかった。筆者自身、以前長期フィールドワークに基づく成果を発表した際、内容的には宗教に関する文化人類学的研究であったにもかかわらず、宗教人類学とは銘打ちにくいと感じたことがあったが、その遠因は調査方法の違いにあったのかもしれない。また報告では、旧来の宗教人類学には都市世界での微細な宗教実践への関心や政治性への配慮が希薄なことも指摘されたが、おそらくその問題は、各地域の宗教現象にある程度不変の深層構造があるとの前提に立って比較する研究姿勢から生じた面があるように思われる。今後の展望としては、同時代的な宗教現象を集約的フィールドワークによって現場から実態を明らかにすると同時に、近代化やグローバリゼーションなどの大きな潮流の文脈も考慮して読み込むような研究手法や方向性が 1 つの可能性として示されたように思う。

もう 1 人のゲスト講師である實川幹朗（姫路獨協大学）は、精神分析や心に関する哲学を批判的に研究しつつ、ある種の臨床心理学的立場から宗教的現象にアプローチしている。個人レベルでの観念や情念の働きをどうとらえるかは宗教人類学においても手ごわい問題なので、それについてのヒントを得たいという思いから発表を依頼した。實川は「日本からの宗教人類学はなぜ見込みがあるのか：事実と意識をめぐって」と題し、研究者のとるべき立場や還元主義を脱した記述の態度などについて論じた。具体的にはたとえば、いわゆるおがみやさんと呼ばれるような民間信仰者が不動明王の出現をリアルな出来事として語るとき、学術的言語はこれを記憶や幻、夢などと解釈しがちであるが、そうした還元主義を慎み、彼らの視点からものごとを見て、記述することの重要性があらためて指摘された。

宗教と宗教的なもの

2 回目の研究会は平成 26 年 6 月 28–29 日に開催し、ゲスト講師に宗教学者の伊達聖伸（上智大学）を迎えた。政教分離のように、宗教的世界と世俗的世界の分離が可能だとする発想を見直すうえで、フランスのライシテ（教会に敵対的な政教分離方針）のあり方を世俗宗教的なものとしてとらえ直す伊達の視点は本研究会にとって示唆的と思われたからである（同時に行なった近代宗教制度報告と国際学会パネル発表に向けての構想については後述する）。

伊達は「『宗教』から『宗教的なもの』へ：フランスの宗教研究における近年の動向と人類学への示唆」と題した発表のなかで、サッカーや原子力など、通常では宗教とは見なされない現象が宗教的機能や意味を帯びて立ち現われる現代的状況があることを指摘した。また、こうした状況は単に宗教概念の枠を広げたり、分類し直したりするといった概念操作で解決する問題なのではなく、私たち自身がなにに宗教性を感じるようになりつつあるのかという深層からの問い直しが必要であるという問題を提起した。ただし、この問題は西欧（主にフランス）の歴史的経験から現われたものであり、儒教やある種の禅宗のように宗教的なものと社会的なものの分離を強く意識しない伝統のある地域では、また別な歴史的文脈を踏まえて再考する必要があるだろう。

近代宗教制度報告

今年度の研究会では、こうしたゲスト講師による発表と並

行して前年からひき続き各研究員によるそれぞれの調査地での近代的な宗教制度に関する報告を行なった。これは、宗教関係の法律、宗教関係省庁、公的な「宗教」概念の使われ方、マスメディアの宗教情報の扱いなど、いくつかの項目について一律に各国の宗教関連の基本情報を各研究員が報告し、調査地ごとの宗教－政治状況の異同を確認しようとするものである。宗教と政治の関係については、中国のように宗教に対する政治的干渉が比較的強い地域では民族誌に詳しい情報が書かれることがあるものの、そうでない地域についてはあまり基本情報が出ていないか、政教分離など特定のトピックのみに偏って言及される傾向が強いという印象があったため、情報の共有を試みた。

ある意味素朴かつ単純な作業であったにもかかわらず、いくつか興味深い点が見えてきた。たとえば、各国ごとに宗教関係省庁のあり方にかなり違いがある点に気づくことができたのは大きな収穫だった。常設の宗教局を有する国もあれば、教育省、文化省、内務省など単独ないし複数の省庁で宗教関連事項に対処したり、重要案件が起こったときだけ臨時に委員会を設立するといった対応をする国もある。また、こうした宗教関連省庁の成立史が日本のように比較的詳細に研究されている国もあれば、必ずしもその由来が明らかではない国もあるように見受けられた。もちろん、実際は他分野で詳細な研究がなされていたとしても、その地域で研究している文化人類学者がこれまで国家の制度的な側面に興味を持たなかったがゆえに、今回のような予備的調査では、そうした先行研究を見つけられていない可能性はある。しかし、そこから逆に見えてきたのは、近代的な宗教行政が民間に浸透した（または浸透しなかった）歴史や、宗教行政機関の末端で働き、民間の宗教実践との接点を持った人々の日常的実践とライフヒストリーなどは、宗教行政についての人類学的研究として開拓する余地があるのではないかということだった。筆者の中国の調査地では、無神論者として宗教行政に携わっていると言いながら、亡くなった母親が夢枕に立ったのを見て急いでお供え物をしたという政府の役人などもいる。無神論者を標榜する人の、宗教との距離感や宗教性について調査・考察することができれば、すでに近代化し脱宗教を果たしたと感じているいわゆる近代的な一般人――そこにはおそらく多くのわれわれ自身が含まれる――の立ち位置を見直す手がかりになるかもしれない。

また、各国の公的近代教育のなかに意識されない宗教的要素が含まれているという視点からその教育実践を見直す研究にも可能性を感じている。一般に政教分離を標榜する国家の近代教育からは宗教的要素は取り除かれていると考えられがちだが、道徳や倫理として教えられている内容には宗教色を帯びているとみなせるものがありそうである。そうした観点から教育実践を研究することで、近代的な宗教性／非宗教性の区別の基準が具体的にはどうなっているのかを明らかにできるのではないかと考える。

バフチャラー女神の聖なる土地にやってきた女性たちは、その目的地で舞い続ける（2014 年 3 月 21 日、インド、グジャラート州のバフチャラー女神寺院、國弘暁子撮影）。

このほかにも、宗教政党の出来方やその社会的許容度、各国のアカデミズムにおける宗教研究環境と研究課題の選ばれ方と傾向、マスメディアの宗教関連トピックの取材方針と報道の仕方などが、現代的宗教状況を理解するうえで興味深い調査対象として見えてきた。こうした領域には、必要に応じて歴史学や社会学などと連携しながら、文化人類学的な視点からも研究すべき部分があると考える。ミクロな調査研究の蓄積が近代的宗教状況のマクロな理解に通じるような工夫をしつつ研究を行なうことが、現代の政治状況を意識した新たな宗教人類学を作ることにつながるのではないかと現時点では考えている。

4 月上旬の墓参りの日である清明節にカトリック教会もミサを行なう（2006 年 4 月 5 日、台湾、台北市、藤野陽平撮影）。

今後の展望

今年度は諸事情で不本意ながら 2 回の研究会しか開催できなかったが、内容的には充実させることができた。来年度の IAHR（国際宗教学宗教史会議）や IUAES（国際人類学・民族学科学連合）などの国際学会でのパネル発表の企画も取りまとめることができ、科研基盤研究 A に応募する研究計画書類も以前より考察を深めたものを提出することができた。近代宗教制度報告を通して得た知見をもとに、現在各研究員はそれぞれの調査地で新たな調査研究に取り組んでいる。本年度後半に研究会を開催できなかったのは残念だが、各自の充電の時間を確保できたと前向きに捉えたい。

来年度は各メンバーによる調査報告を主眼に据えて年 4 回研究会を実施する予定である。研究報告書や書籍出版の具体的構想にもとりかかり、新たな宗教人類学の創造をより実践的に展開したい。

ながたに ちよこ

九州大学大学院比較社会文化研究院准教授。専門は、文化人類学的手法による中国宗教研究。著書に『シャンムーン――雲南・徳宏タイ劇の世界』（長谷千代子訳著、岳小保共訳 雄山閣 2014 年）、『文化の政治と生活の詩学――中国雲南省徳宏タイ族の日常的実践』（風響社 2007 年）、論文に「『宗教文化』と現代中国――雲南省徳宏州における少数民族文化の観光資源化」（川口幸大・瀬川昌久編『現代中国の宗教――信仰と社会をめぐる民族誌』昭和堂 2013 年）など。